

# 三日月はなぜ傾いているのか？ ～ 三ヶ月の形から季節を読み解く ～

庭園文化研究分科会 角谷 篤志

## 1. はじめに

庭園文化研究会の視察に参加してきた中で、いつも不思議に思うことがある。それは「なぜ、ほとんどの灯籠に三日月が刻まれているのか」そして「灯籠ごとに三日月の傾きが微妙に異なるのはなぜだろうか」と言うものである。



微妙に異なる三日月の傾き

出雲流庭園は出雲文化、とりわけ農家の文化に根差しているものである。出雲流庭園の灯籠に刻まれた三日月は農業に密接に関係し、五穀豊穡を祈願しているものかもしれない。そうであれば三日月が表している季節と時刻は決まっているのではないかと仮説を立てた。そこで、灯籠に刻まれている三日月の形について考察してみた。

## 2. 三日月

三日月とは、新月の日から数えて3日目の夜に観測されることになる円弧状の細い範囲が輝いている月である。陰暦3日の夜の月であり、朔（月齢0日）が陰暦1日なので、三日月の月齢は3日ではなく2日であることはあまり知られていない。三日月より早い2日目の月はほとんど見るができない。新月は月が全く見えない時期のため、昔は三日月から遡って新月の日を求めていた。三日月は最初に見える月であることから、輝きを取り戻した真新しい月という意味での新月（しんげつ）とか、初月（はつづき、しょげつ）、若月（わかつき、わかづき）などとも呼ばれている。また、非常に細く見えることから眉月（まゆづき、びげつ）とも呼ばれることもある。「三日月」とは、女子の眉毛の異称でもある。

この細い三日月は、春や秋といった季節の違いに関係なく、太陽が西の空へと沈んでいく日没後のわずかな時間だけ西の夜空の低い位置に観測され、直ぐに沈んでしまう。三日月は、ひと月（約30日）ごとに一度しか見る事が出来ないが、天気が悪いと見えないため、三日月を見つけることができたるとても縁起が良い月だと言われている。昔の人は、三日月に願いを込めると、やがて満ちて願いが叶えられると信じていた。



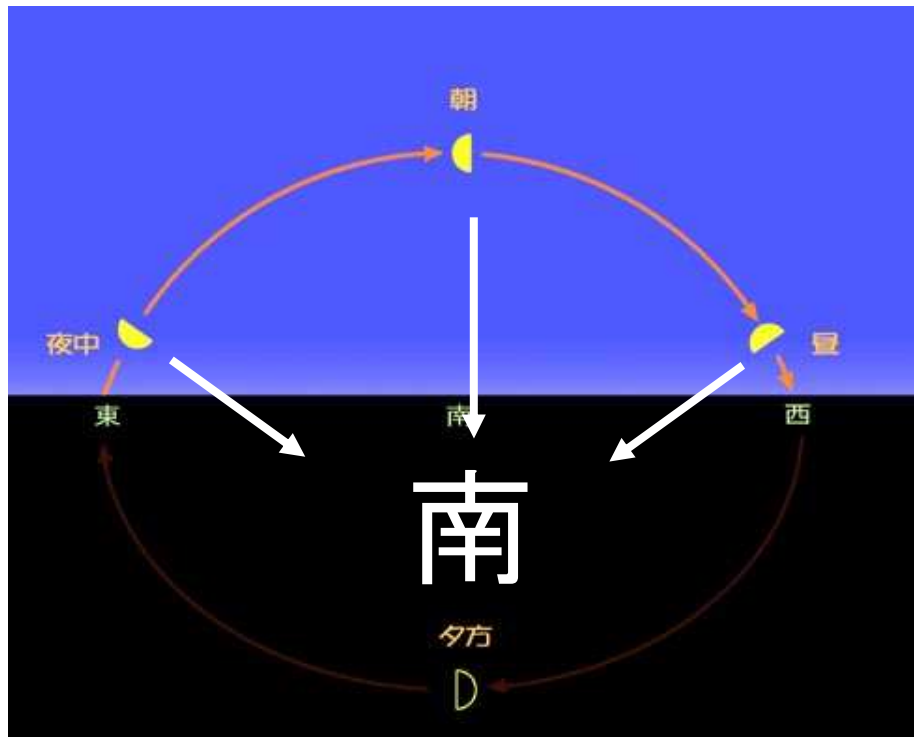
月に祈る山中鹿之助像（写真：しまね観光ナビ）

尼子の勇将として知られる戦国時代の山陰地方の武将、山中鹿介幸盛は「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」と三日月に祈った逸話で有名である。この名言は山中鹿之助の生涯を描いた「三日月の影」という物語から有名になり、昭和8年～20年まで12年間、小学校5年生の国語の教科書に載っていた。私は小学生の頃に道徳の時間で学習した記憶があるが、今頃の小学校では山中鹿之助のこの話しを授業で取り上げていないとのことである。

なお、伊達政宗など戦国武将の兜の前立てには三日月をあしらったものが数多くあり、神仏の加護を求めたためであると言う説がある。（異説あり）

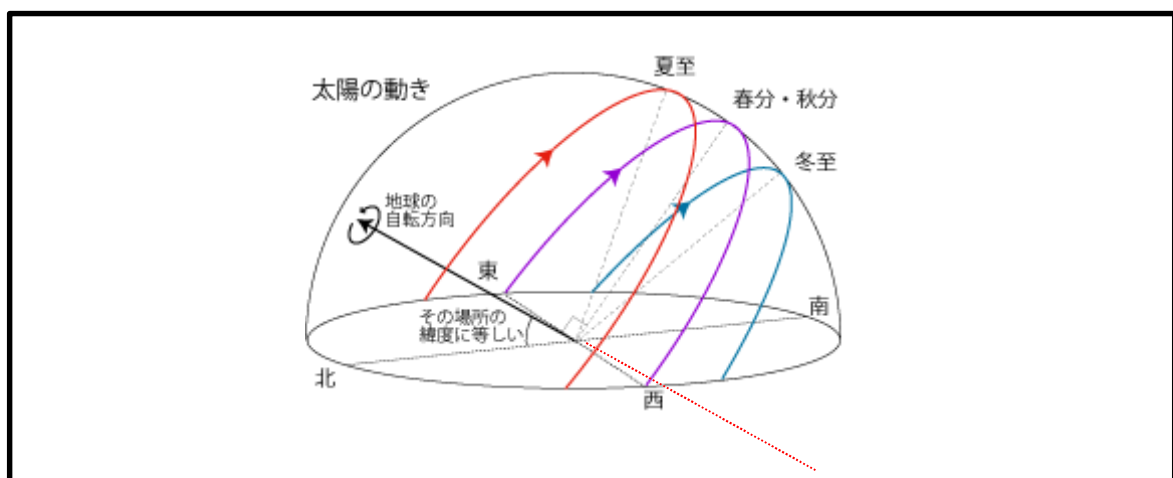
### 3. 月の日周運動

中学校の理科で、月の上下の頂点を延長した先は南である、と習ったのではないか。地球が自転するときの回転の中心が地軸の延長線上になるため、見かけ上、南の地平線の下が回転の中心になる。



春の半月（下弦の月）の頂点を延長した先は南の地平線の下  
(図：平塚市博物館)

地球が 24 時間かけて 360 度を自転していることにより、見かけ上、我々は月が東から西に移動している様に見える。更に、月は南の地平線（の下）を中心に回転しているため、南・南西・西の位置が変わるごとに、それぞれ月の傾きも異なっている。すなわち、月の傾きを見るだけで今浮かんでいる月の概ねの方角が分かってしまうのである。



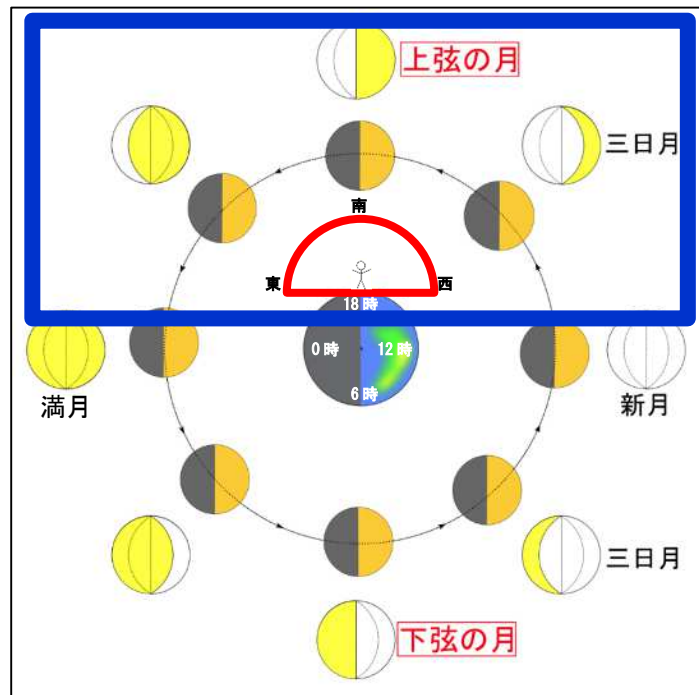
回転の中心は地軸の延長線上  
(図：国立天文台)

#### 4. 月の満ち欠け

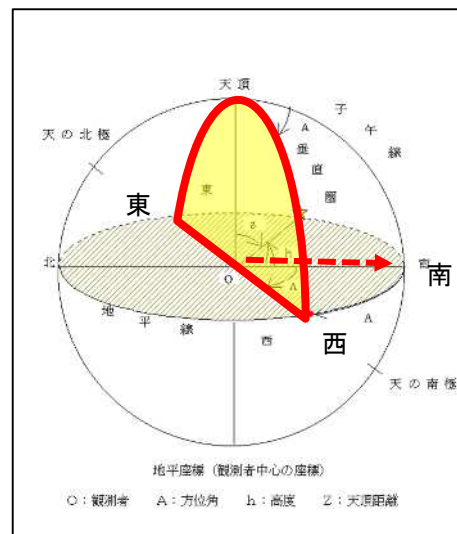
月がどのような形に見えるかは、地球と月と太陽の三者の位置関係で決まる。

月は地球の周囲を約30日の周期で公転していて、新月から新月までの30日の半分の15日目で満月になるため「15夜お月さま」と言い、新月を1日として三日月は3日目の月になる。

満ち欠けの順番は、月が見えない新月から順に、三日月→上弦→満月→下弦そして再び新月という順番で満ち欠けしていく。この満ち欠けの周期を朔望月といい、朔とは新月、望とは満月のことである。藤原道長が読んだ歌である「この世をばわが世とぞ思ふ望月(もちづき)のかけたることもなしと思へば」の望月とは満月の事である。

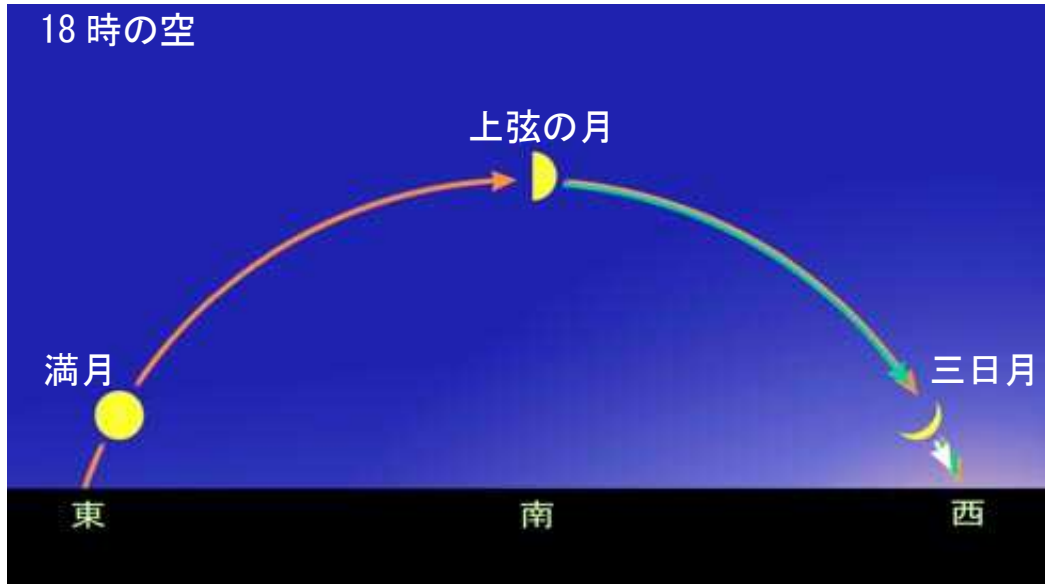


月の満ち欠け



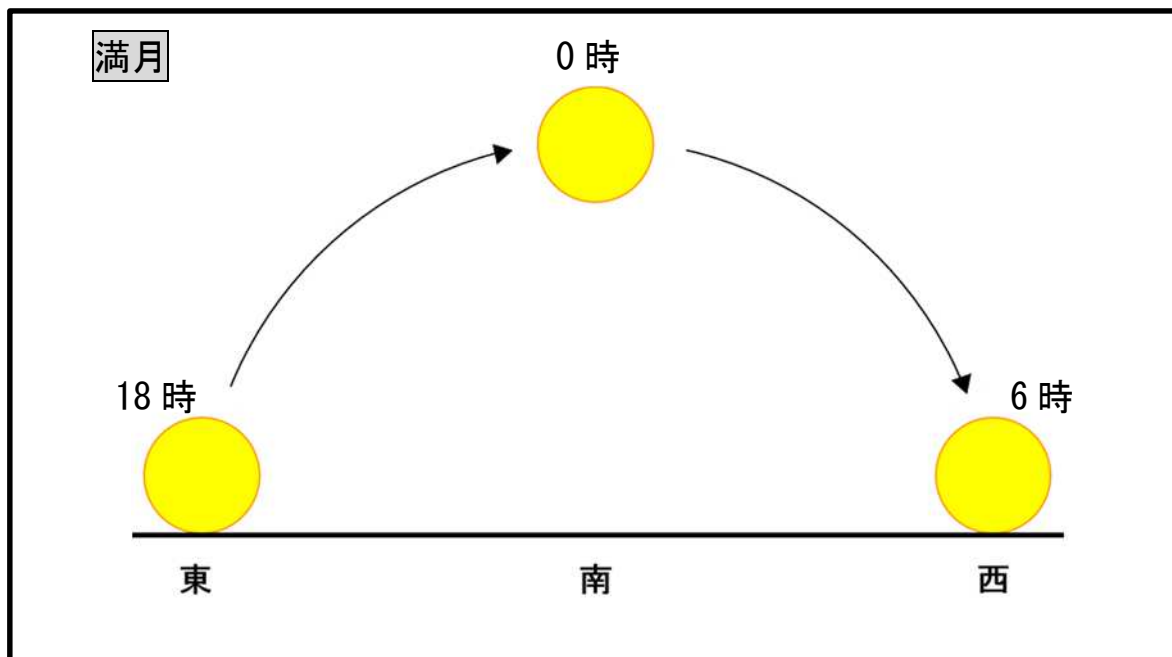
中心から赤枠の空を見ている

夕方に月の見える方角は、満月は東に、半月（上弦の月）は南に、三日月は西に見える。月は東から西へと移動して行く。東に見える満月は南中し、明け方には西へ沈んで行く。南中している半月（上弦の月）は約6時間後に西へ沈み、三日月はまもなく西の地平線の下へ沈んでいく。



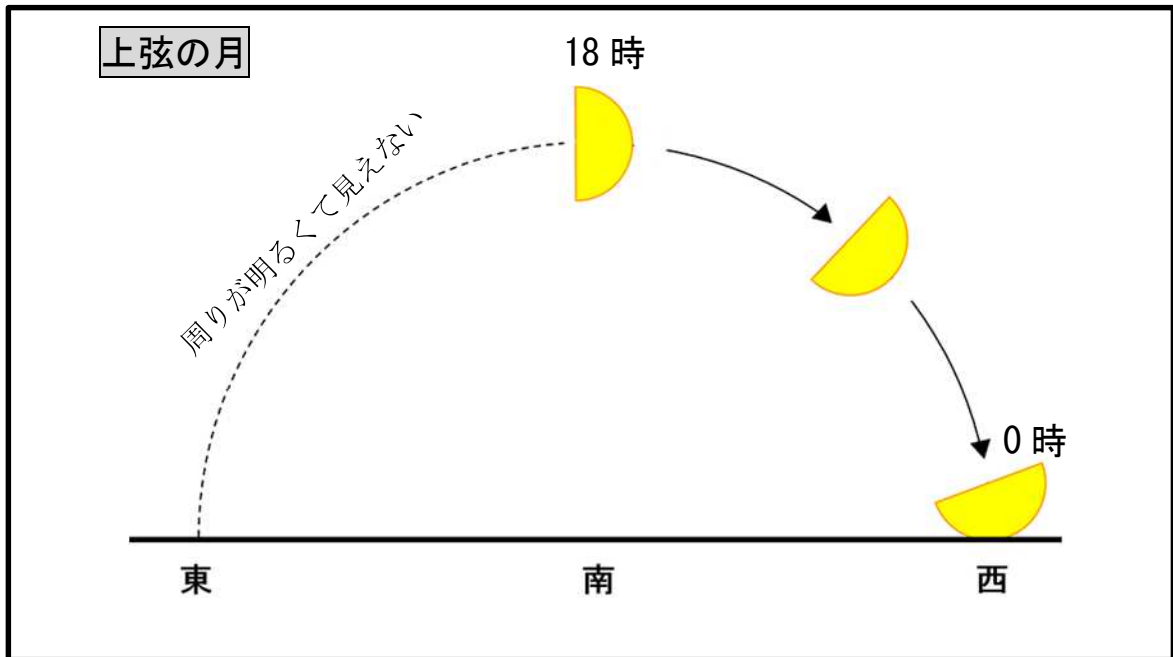
夕方に月の見える方角  
(図：平塚市博物館)

「満月」は、夕方18時頃に東の地平線から昇り、午前0時頃に南中し、朝6時頃になると西の地平線に沈む。



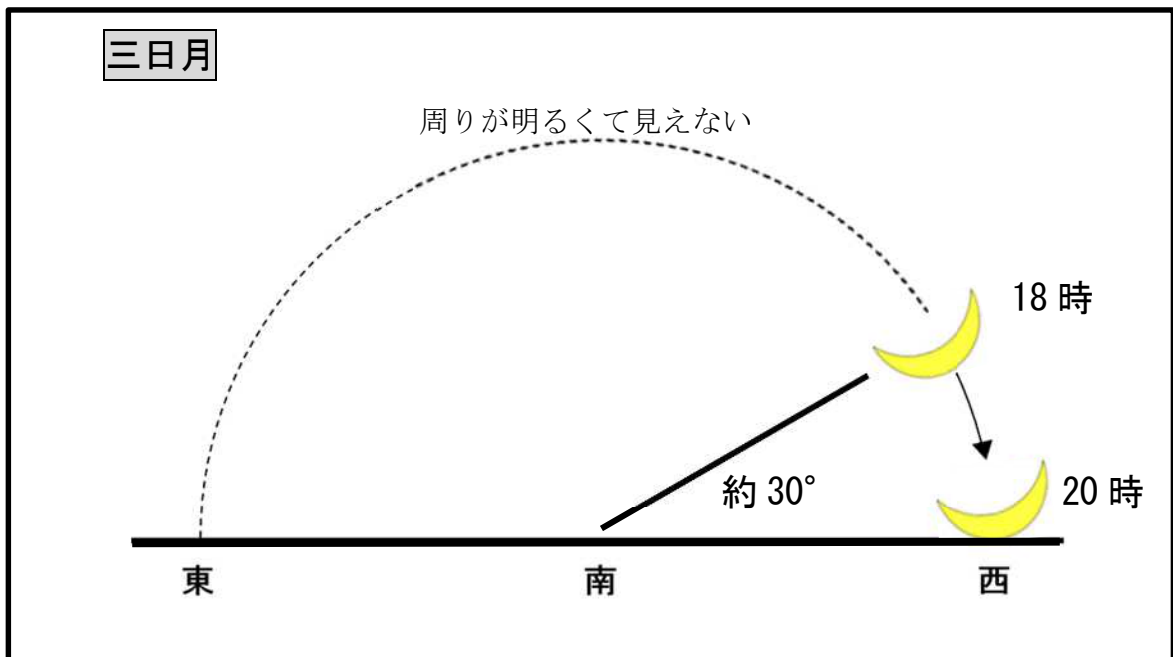
満月の動きと形や見え方

一方、「上弦の月」は、夕方 18 時より前には周りが明るくて見えず、夕方 18 時頃になって暗くなってから南の空に見え始める。そして、午前 0 時頃になると西の地平線に沈んでいく。



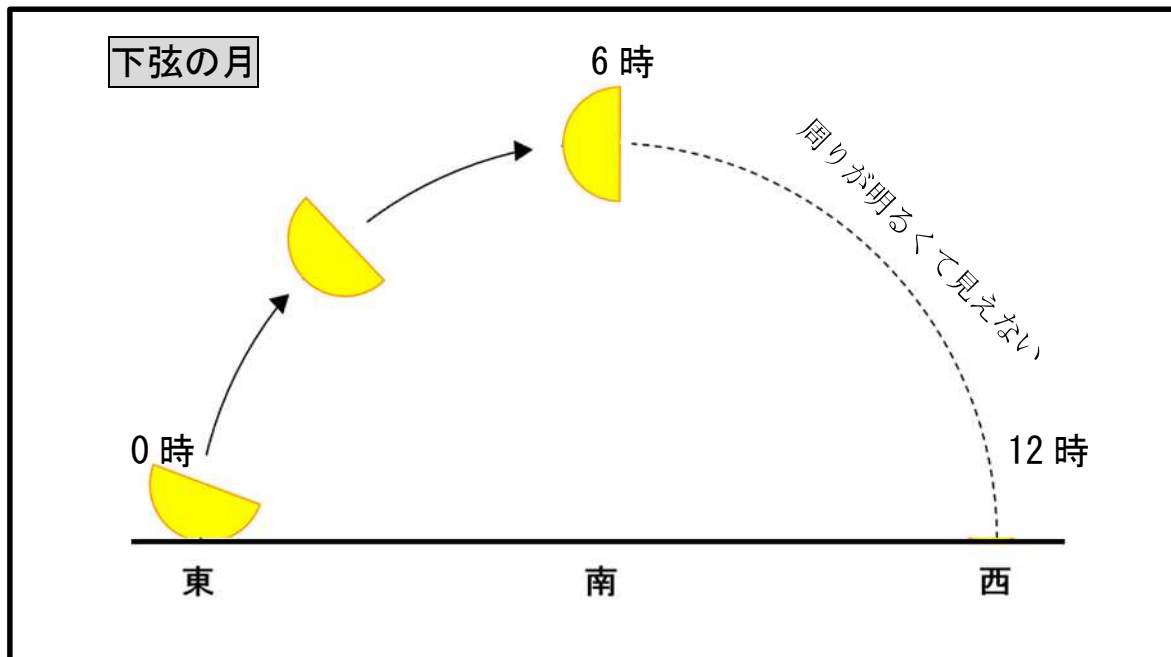
上弦の月の動きと形や見え方

「三日月」は、白道上で新月から 2 日分、約  $30^\circ$  回転した状態で観測される。季節によって変わるが春分秋分の頃には、夕方 18 時頃に周りが暗くなるにつれて西の空に見え始め、約 2 時間後の夕方 20 時頃になると西の地平線に沈んでいく。



三日月の動きと形や見え方

「下弦の月」は、真夜中の0時頃になると東の空に見え始める。そして、午前6時頃になると南の空高くに南中する。夜が明けて周りが明るくなるにつれて見えなくなっていく。



下弦の月の動きと形や見え方

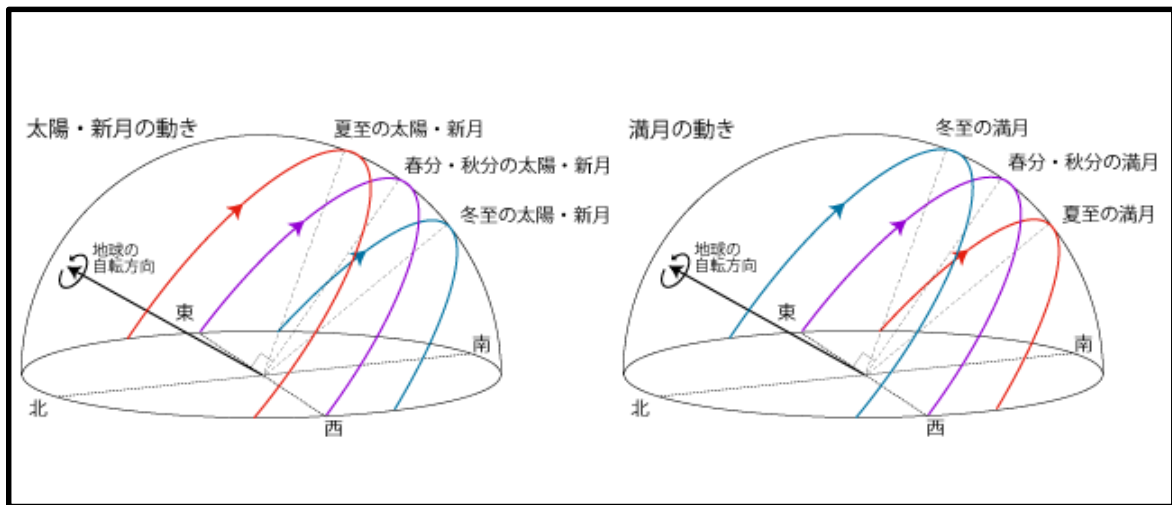
教科書では「下弦の月」は、朝になると太陽が昇り周囲が明るくなっていくので見えなくなると教わるが、太陽の光を反射している月は、昼12時前になっても実際には見えることがある。



2023年12月6日10:45 出雲市にて  
「有明月」=24日月（下弦の月の翌日）

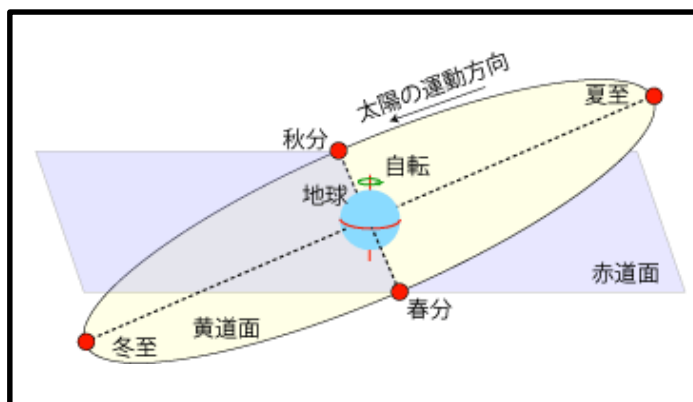
## 7. おわりに

春夏秋冬の季節ごとに南中する太陽の高さ（南中高度）は季節によって異なることから、月もそれぞれの季節で南中高度が異なることは容易に想像がつくであろう。

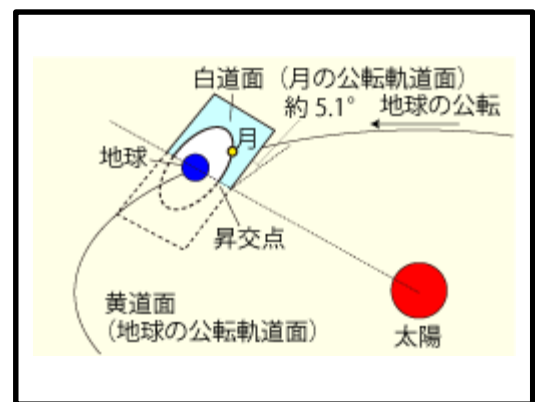


新月の南中高度、満月の南中高度 (図：国立天文台)

天球上で太陽が通る道を黄道、月が通る道を白道と呼び、天球上の黄道を結んだ面を黄道面と呼んでいる。月は黄道面に対して約 5.2 度傾いた軌道であり厳密には白道という月の通り道に沿って動いているが、大まかには黄道に沿って動いていると考えて良い。



地軸と赤道面と黄道面 (国立天文台)



黄道面と白道面 (国立天文台)

月は見かけ上、南を中心に回転運動をしている。「三日月」は太陽が地平線の下に沈み周囲が暗くなってから見え始め、日没後のわずかな時間だけ西の夜空の低い位置に観測されたと思うと直ぐに沈んでしまう。このため1日での三日月の傾きは時間に関わらずあまり変化がない。1日での三日月の傾きには変化があまり無いのであれば、三日月の概ねの傾きは季節によってのみ決まると考えられる。では、灯籠に刻まれた三日月は、一体いつの季節の姿を映したものであろうか。などは深まるばかりである。